

# 聖なる神——イザヤの召命

イザヤ 6 : 1 - 8



司祭 ヨハネ 井田 泉

2019年6月15日

三位一体主日・聖霊降臨後第1主日

奈良基督教会にて

今日は旧約聖書日課から、イザヤの預言者としての召命の場面に近づいてみたいと思います。

時は紀元前8世紀、場所はユダ王国の首都エルサレムの神殿です。若者イザヤはひとり神殿で祈っていました。イザヤは信仰深く、また正義感の強い青年だったと思います。信仰、言い換えれば神への思いが深く、正義感が強ければどうということになるのか。世の中の現状に対して怒りと嘆きを持つのです。こんな不義不正が許されるはずがない。イザヤは後にこう叫んでいます。

「1:23 支配者らは無慈悲で、盗人の仲間となり、皆、賄賂を喜び、贈り物を強要する。孤児の権利は守られず、やもめの訴えは取り上げられない。」

「2:7 この国は銀と金とに満たされ、財宝には限りがない。この国は軍馬に満たされ、戦車には限りがない。」

「3:14 主は裁きに臨まれる、民の長老、支配者らに対して。『お前たちはわたしのぶどう畑を食い尽くし、貧しい者から奪って家を満たした。15 何故、お前たちはわたしの民を打ち砕き、貧しい者の顔を白でひきつぶしたのか』と、主なる万軍の神は言われる。」

およそ2700年後の今の日本の国はどうでしょうか。政府はF35戦闘機を100機以上追加購入する。値段は1兆円をはるか

に越えます。一方年金は減らされ、貧しい人の生活はあっそう  
圧迫される。辺野古の海は沖縄の人々の民意を無視して埋め立  
てられている。わたしは怒っていますけれども、青年にはもっ  
と怒ってほしいと思います。

さてこの日、青年イザヤはおそらくひとりエルサレムの神殿  
で祈っていました。胸にはこの国この社会への怒りがあり、  
人々の心が神さまのほうに向かず自分の利益と安泰のほうばか  
りに向いていることへの失望と嘆きがある。たぶん彼はこれまで  
この現実に対して声を上げてきたのです。けれどもどうにも  
ならない。どうしてよいかわからない。熱心であるほど、逆に  
無力感に襲われます。

この日、彼はそんな自分を抱えて、自分の思いを神の前に吐  
き出して祈っていたのです。

祈っているうちに思いがけないことが起こりました。目の前  
に神がおられる。こう書いてあります。

「6:1 わたしは、高く天にある<sup>み</sup>御座<sup>ざ</sup>に主が座しておられるの  
を見た。衣の裾は神殿いっぱい広がっていた。」

イザヤは神を見た。見たと言っても実際に見たのは、神の衣  
の裾が神殿いっぱい広がっている光景ですが、予想もしなか  
った、息を呑む、恐ろしい経験です。

「6:2 上の方にはセラフィムがいて、それぞれ六つの翼を持ち、二つをもって顔を覆い、二つをもって足を覆い、二つをもって飛び交っていた。3 彼らは互いに呼び交わし、唱えた。『聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う。』

4 この呼び交わす声によって、神殿の入り口の敷居は揺れ動き、神殿は煙に満たされた。」

青年イザヤはこの聖なる神の前に自分は滅びてしまう、と感じました。

「6:5 わたしは言った。『災いだ。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者。汚れた唇の民の中に住む者。しかも、わたしの目は、王なる万軍の主を仰ぎ見た。』

彼はこの墮落した社会に憤り、正しいと思うことを語り叫んできました。しかしその自分自身の心も、言葉を発する自分の唇も、聖なる神の前に清くない。自分の言葉の背後に潜む自分の高慢は今や隠しようがありません。

「災いだ。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者。」

そのような罪ある自分が、聖なる神を見てしまったのです。

ところがこの死に瀕したイザヤのところに、天使セラフィムのひとりが、飛んできました。セラフィムの手には神の前に燃

える祭壇から <sup>ひばきみ</sup> 火 鉢 で取った炭火がありました。セラフィムはその燃える炭火をイザヤの唇に押し当てました。イザヤの唇は焼かれた。唇を焼かれたことによって、彼の心、彼の存在全体が神の火によって焼かれた。彼は自己の死を経験したのです。

けれどもイザヤの前にご自身を現された神の目的は、イザヤを滅ぼすことではなく、彼を焼き清め、赦して、彼を新しい人として生まれ変わらせることでした。

セラフィムは言います。

「7 見よ、これがあなたの唇に触れたので、あなたの <sup>とが</sup> 咎 は取り去られ、罪は赦された。」

イザヤは罪の自覚と死をとおって、神の火による清めと赦しを経験したのです。

このとき、イザヤは神の声を聴きました。天上から聞こえる声です。神は天使たちを集めて、会議をなさっておられるのでしょうか。

「8 誰を遣わすべきか。誰が我々に代わって行くだろうか。」

イザヤは答えて言いました。

「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください。」

神の火によって焼かれ、一度死んだ彼。しかし神の火によっ

て清められ赦された彼にとって、他のどこに人生の道があるでしょうか。この聖なる神、火をもって自分を焼き清め、赦された神。この方に自分を差し出すしか道はないのです。

「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください。」

神はこのイザヤの申し出を受け容れ、彼を預言者とされました。彼の口には神の言葉が与えられます。ここからイザヤの人生が始まります。苦難に満ちた人生。しかし神とともに歩む祝福された人生です。

イザヤは、わたしたちからは遠い昔の、特別な存在です。けれども、わたしたちと無関係ではありません。

第1に、神は、切に祈るわたしたちに何らかの仕方でご自身を示してくださいます。予想しない仕方で、予想しないときに。ですからわたしたちは祈ることに熱心であるべきです。神さまのもとに、わたしたちの抱えている大小のことを持って行って聴いてもらうのです。その祈りを神は無視されません。

第2に、神はわたしたちにも愛の火を投じられます。これが聖霊の働きです。それは一方では、やけどするような、痛みを伴うものです。けれどもその火はわたしたちの罪を赦し清めて新しくする火です。十字架に死なれたイエスは、ご自身の愛をわたしたちに注いで、わたしたちの罪を覆い清めて、わたしたちを新しくしてくださるのです。

第3に、神さまはわたしたちを招いておられます。わたしたちが自分の平安と安泰だけを求めて生涯を終わるのではなく、神さまのために、隣人のために、社会のために、自分を差し出すようにと招いておられます。神さまは、神の願われる世界の実現のために、わたしたちと共に働くことを願っておられます。

祈ります。

かつてイザヤにご自身を現された神さま、わたしたちを引き寄せてあなたのみ前に立たせてください。わたしたちにもご自身を現してください。わたしたちの高慢を砕き、あなたの愛の火によってわたしたちを清め、赦してください。自分の平安と安泰のみを求めるのではなく、あなたの招きにこたえて生きるわたしたちにしてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン